

9. 受肉

ネフェルニシアの龍の血の気配が途絶えたことは、速く離れた場所においても、同じ血を引くシジマには感じ取ることができた。予想の範囲外ではないが、いざさか早い。

落陽の草原、まさにかげろうと一対一で斬り結んでいる最中のことだった。自身の技量も今や円熟の域に達していて、ここぞ最高潮とっていいシチュエーションだったのに。惜しい。残った時間で無理やりにもど決着をつけに行くか…？いや、それは無粋だ。技量を尽くしたとは言えない。最後の瞬間まで、二人で技を昇華させることにすべてを捧げよう…。

シジマのシステムをチェックしていたブラウクにも、事態は把握できた。そうか、常闇の君はもうやるのか。アビーがなぜか、やれスタイルにもっとこだわってみたいだの、声色はもっとハスキーな方がいいかしらなどと、くすぐず言い訳をつけて、自分の献養体を完成させていなかったものだから。シジマの中の龍の血の成熟度合いは十分ではあったものの、もう少し先になるのかと思っていた。だが、やるということは、<仮面>殿にとつてのタイムリミットが来てしまったということだろう。下剋上が叶わなくなってしまうと、彼らの今までの計画すべてが無駄になってしまう。仕方ない。仕方ないが…。

思っていたより、心の動揺が大きいこと自体に、ブラウクは動揺していた。エゴを強化し、研究目的に向かって一切の迷いを捨て行動していけるように、自身の脳を改造したはずだったのに、シジマの成長を追い始めてから、妙に心が揺れる瞬間が度々あった。おそらく、自分の研究欲のさらに根源にある、もともと動機に関わっているのであろう。推測するに、このような動揺を回避するために、過去の自分がわざとそれに関する記憶を消去したのではないだろうか。しかし、記憶というのは様々な他の情報と絡まり合って存在していて、一部分だけを都合よく消してしまうことは難しい。完全に消去しきれなかった僅かなつながりが残っていて、それがシジマという存在をきっかけに呼び起されようとしている…。

何千年も昔のことが。彼には息子がいた。親に似て研究欲が強く。親以上に才気煥発で。ブラウクはその子が成し遂げる成果に、突き止める世界の真実に、自らの夢も託したかったのだった。しかし、不慮の病でその子は死んでしまった。ブラウクは自身の研究全てをかけて、それを埋め合わせようとした。新しい命は、その探求心の一切を妨げられることのない、完全な存在でなくてはならない…。

ハードルは高いが、理論上達成できそうな目標だった。だが一つだけ問題があり、それはたとえ生み出すことができても、かつて愛した我が子そのものではないのだ。その事実は、これからの自分が、研究を進めていくモチベーションを維持するうえで都合が悪い。だから…

今のブラウクにはその過去が正確には思い出せない。シジマに、本当にしてやるべきことが分からないのが苦しい…！過去の自分め、雑な仕事をしておって。こんなことなら最初から消したりせずに、ちゃんとその事実と向き合えばよかったのではないかと？まあ、それができる心の強さが無かったから、改造なんてするハメになったのではあるが。だが、ああ、来てしまふ、その時が…！

極限まで研ぎ澄まされた刃閃が、互いの喉笛を切り裂こうとした刹那。その時が来た。シジマの刃は止まったが、その結果のシミュレーションには満足だった。互いの首が飛び、そこから飛び出た二人の思惟が、広大な宇宙に解き放たれて、永遠に戯れ続けるさまを夢想できた。怪訝に思ったかげろうもまた、刃を止めた。今の今まで彼女は自分の内面の変化に気づかず。ひたすら心地よく二人の技が高まっていくの身を任せていた。それほどまでに、シジマの技と、それにかける真摯さは極まっていたのだった。

「生まれきた甲斐がありました。恋を知った」そう言って、シジマは動かなくなった。かげろうはその体をやさしく抱き止めた…。



龍の血は引き揚げられ、シジマは活動を停止した。それを遠いところでモニターしていたブラウクも、動かなくなっていた。実のところ、ブラウクなどという人物はずっと昔に存在しなくなっていて、残された目的遂行のプログラムだけが走り続けていたのだ。それが完成されたのだから、プログラムは終了したのだ。

そういうことに、なったのだった

ソウラ達と戦っていたギラチスとエストリス達にも、その気配は伝わった。決着まであと、もう一手！シジマ同様自らの能力を完全に使いこなしにかけていたギラチスだったが、ソウラ達もまた、ギラチスの能力を見切りかけていた。

質量とはエネルギーであり、質量を出し入れするということは、莫大なエネルギーが入り出しているということでもある。そんなエネルギーがあるなら、熱にでも変換してやった方が、よほど強力な攻撃ができる筈だ。それをしていない。そういうエネルギーの使い方をしていない！ギラチスの自身の重さを変化させる能力は、もっとスマートに管理されている…。

何度も戦っている間に、そのルールに気づいたのはやはりギブだった。重く、軽く、重く、軽く…。少しだけ重くなった後は、少しだけ軽く。とても重くなった後は、とても軽く！ギラチスは、時間軸に対して、自身の質量を揺らし、波を作っていたのだ。重くなった後にも重くなるには大きなエネルギーが必要になるが、重くなった後に同じくらい軽くなるのにはほとんどエネルギーが必要ない。さらに、その振幅は少しずつエネルギーを加えることによって大きくしていくことができる。ブランコのふり幅を少しずつ大きくしていけるように…！

強力な能力ではあったが、これらのルールはギラチスの戦略を拘束する。ソウラはその隙につくことも、粘る…！

こちらもう時間がないのに、コイツは…！自身が、あの人の作った作品が、完全なものであることを証明するために、コイツにだけは勝たなくてはならないのだ。ツンデレでいいから、認めてほしい。誇りに思ってもらいたい…！

意識してそう作ったわけではなかったが、ギラチスの動機は誰かに…というか、自身の親であるエストリスに、認めてもらいたいということであり、作り主とよく似ていた。エストリスもそのことには気付いていたが、無論恥ずかしくて指摘できるものではない。

そうか、ソフィーヌやブラウクも、もうお役御免になってしまったか。レムナスの<仮面>からしてみれば、完全な体さえ手に入るといえば、その性質に詳しい知識を持った人間など危険なだけである。そりゃ最優先の排除対象だろう。その程度のことは承知の上で働いてきた。働きたいあのひねくれ者の<仮面>が、要求してきた能力を存分に振るった後の世界など、体験したくもない。大事なものは、研究成果だ。破滅的なことだと分かっているけど、それを成さなければ救われない集団が、魔博士たちなのだった。

だというのに、妙に気持ち平坦なのであった。もっと、倒錯的な高揚感に包まれてこの時を迎えるものだと思っていたのに。うん、できた。という以上の感情が湧いてこない。過程を楽しみ過ぎて、目的が形骸化していた感も無くはないかな。だが…

エストリスのしている前で、決着が付こうとしていた。嵐のような攻防の狭間、満身創痍のソウラの指先で火花が小さく爆ぜる。<龍の爪>を警戒したギラチスが自重を極限まで軽くして受け流そうとしたが、それはフェイントで、ソウラは<爪>を出そうとした腕でそのままつかみかかると、頭上に振り投げた。何しろ軽いので布切れのように宙に浮く。体勢を崩された！揺り戻しが来て次は重くならざるを得ない。奴はそこに付け込んで、止めの一撃を繰り出してくるだろう。となれば、こちらも次の一撃で確実にけりをつけてはならない。現状の高さと姿勢。落下のエネルギーと体のひねりを利用して、最速、最重量の攻撃を仕掛けるための動きは、ソウラにも読み易かった。ほとんど萎えかけている腕の力でも、<爪>を発生させて、その軌道に置いておけば…。ギラチス自身の運動エネルギーが、容易にその体を破壊したのだった。

半身をズスタに破碎されて、ギラチスが落下する。彼はそれでも、ぼろぼろと泣きながら、這ってでもソウラに立ち向かうとした。それは…

僕のためにやっているのだ、ということは、忌々しいことに、エストリスにはよくわかってしまうのだった。全く、いつも、この悪戯鬼は…！

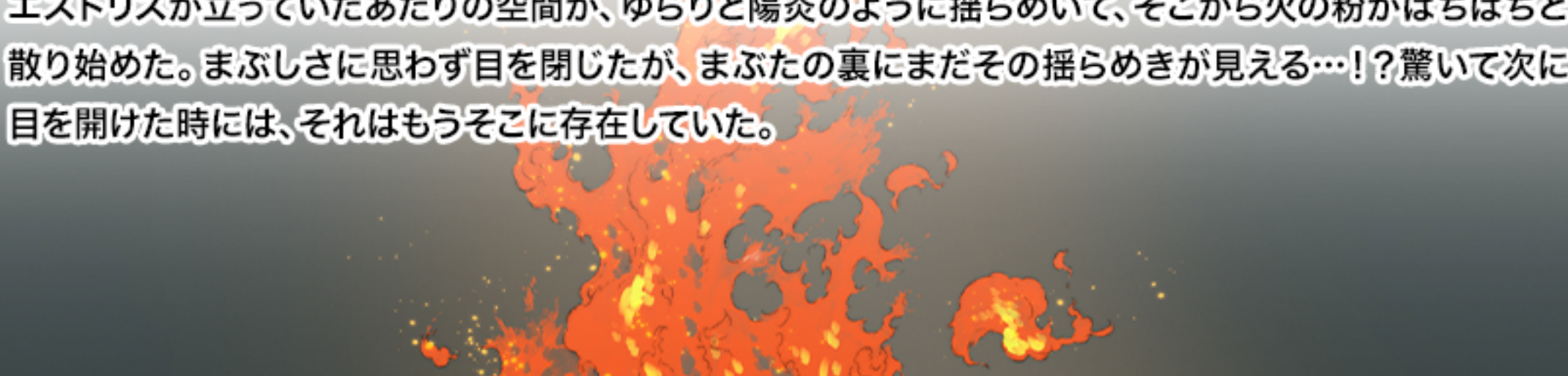
今までずっと、誰かを見返すために、誰かから奪うために、研究を続けてきたのだと思っていた。でも、今のギラチスの気持ちが胸に痛いのは、なんで…！？

本当は、誰かに何かを与えたくて、与えられたくてやってきたのではないかと…？今、自分が何かを与えたい相手は…。

そう思ってギラチスを見やると、もう彼は動かなくなっていて、繰り糸が繋ぎ留められなくなっていた部品が、ぼろぼろと脱落し始めていた。

嵌められた。常闇は驚くほど僕の本性を理解していて、計算づくで誘導していたのだ。こんな形で全てを失うように…。その痛恨の念が、ほぼ自身にただの操り人形だったことを認めさせ…本当に、そのようになった。かつてかげろうに切り裂かれた時のように、エストリスを構成していた部品がからからと分解して、呆然と見つめるソウラたちの前に転がった。そして…

エストリスが立っていたあたりの空間が、ゆらりと陽炎のように揺らめいて、そこから火の粉がばちばちと散り始めた。まぶしさに思わず目を閉じたが、まぶたの裏にまだその揺らめきが見える…！？驚いて次に目を開けた時には、それはもうそこに存在していた。



それは、どうやら人間の青年のようなシルエットをしていたが、体の節々から火を噴き上げていて、上昇気流に吹き流される髪など、炎そのものだった。体表に走る青黒い紋様は、<龍脈>に見えなくもない。その場にいた全員が、ほぼそうだと予感したが、アズリアにはその気配から特にはっきりと確信できた。レムナスの<仮面>が、受肉を果たして、夢の中から出てきたのだ…！

かれは、すぐ隣で、さっきまでエストリスだった部品を静かに見下ろしていたアビーに話しかけた。ごころうだったね。本当はもう少し育ててほしかったが、時間が来てしまった。その種を私に渡して、お前ももう休みなさい。その言葉は、アビーにはとても蠱惑的に感じられた。これにて、完遂。呪わしい自分や我が子の生も、これで報われる。ようやくこの苦惱から解放されて、心静かな生命に自分を還元できるのだ。けれど、自分がそうなって、残された世界では…

背後には、戦い続けて満身創痍のソウラたちの息遣いが感じられる。アビーは少し寂しそうに笑って、かれから一歩後ずさった。意外な行動だった。妄執にここまで心を狂わせてきた女が、今更なんだというのだろう。もう、お休み。もう一度言った。ソフィーヌも、ブラウクも、エストリスも、ちょっと悪夢を見せてやれば、すぐに自分のことを、死体だのプログラムなどと思い込ませて、心をもみ消してやれた。だがアビーはそうできなかつた。あれだけの生臭い心から解き放たれたが…。

まあ、いい。種を取り上げるのは容易なことだ。かれは次にアズリアの方を見た。次点でかれの脅威になる可能性があるのが、この少女だった。彼女の正体に関してはかれも完全には解明できていない。自分同様、傷ついた<原質>が、回復のために眠りに付かざるを得ず、物質世界に顕現するのが先延ばしになって、思いもかけず<仮面>だけが自由を得た状態であることは推察できる。自分と違い彼女は自らの在り様に対する知識がなく、なぜか最初から肉体を持っている。しかも強大な龍の血の力を納めておくにはあまりにも危なくない、弱々しいヒトの体なのだ。

これを仕組んだ夢龍レムナスの思惑はわからないが、消しておくに越したことはない。イシュナグ離宮では彼女の体に乗っ取って使うことも考えたが、今はもっと便利な体を手に入れている。もういらぬ。邪魔なだけだ。

察した仲間たちが立ち向かってきたが、一蹴した。ただでさえギラチスと戦ってぼろぼろだった上に、こちららは献養体たちが身の内面で育て、かれに馴染むよう最適に調整された龍の血の力を、全て備えているのだ。ネフェルニシアの力を発現させれば触れさせることすらなかったし、ギラチスの臂力も、シジマの技も、全て元の持ち主よりうまく使える。早々に蹴散らして、アズリアの前に立ちふさがった。色々回り道をさせられたが、過程はなかなか面白くもあった。さあ、燃やしてやる…！！

高熱のガスが爆発的に噴き出して、アズリア達に迫った。前髪がちりちりと焼け付き始める。もうだめだ…！そう覚悟した時、アビーが彼女の前にこのこと歩いてきて、手の内の献養体の種を、ぱくりと飲み込んだ。さすがにレムナスの<仮面>もぎょっとした。体内で解き放たれた強大な龍の血の力が、アビーの肉体を急激に膨張させ、数秒で巨木に変え、炎を遮った。啞然とするアズリアの目の前で、木の表面がぐにやりとゆがんで、アビーの顔が現れ、安心させるように、にっこりとほほえんだ。

かつて海底離宮で、アズリアとソウラの放った炎に焼かれながら、アビーは眠る赤子の姿を視認した。それはかつての我が子だったのか、あるいは未来のソウラとアズリアの子だったのかもわからない。これまで何千年も呪ってきたひとの心。猜疑と欺瞞で自らを閉ざし、容易く憎悪に流され、裏切り、傷つける…。そんな呪いから、決して解脱することのできない、出来損ないの心…。でも

やっぱりあの出会いの喜びには、引き換えることができないのだ。

ブラシー パーシー ルルルンポウ♪

世界の果てまで ひとっとビュン♪



パシルーラの魔力がソウラ達一行を吹き飛ばした次の瞬間、辺りが高温の炎にまかれた。愛しのマイスイートビー。貴女と貴女の子の、これからのいのちが、実りの多いものでありますように…ああ、私はあの時、あの子にこうしてあげたかったんだな…

転移させられる直前、炭化した巨木がくすぐずと火の海の中に崩れ落ちていくのが見えた。呪いの炎に焼かれたはずなのに、その灰は星のようにきらきらと空に舞い上がっていくのだった。